新約聖書における平和*

Peace in the New Testament

原口　尚彰
Takaaki HARAGUCHI

はじめに

平和は政治的・社会的主題であるが、神と人間の関係を問う宗教的次元を持っており、宗教的言説において採り上げられる重要な主題でもある。キリスト教の平和思想の基礎をなす聖書の平和観について言うと、旧約聖書の戦争や平和に対する態度は両義的であり、宗教的動機に基づいて戦争を肯定する聖戦論がある一方で（出14:14; 15:1-5; 17:16; 士5:4-23他）、究極の平和を希求する預言者の言葉も存在している（イザ2:1-5; 9:5-7; 11:1-10; ミカ4:1-3）。これに対して、新約聖書の立場は一貫して平和主義的である。新約聖書では終始平和ということが語られ、平和は中心的な神学的主題の一つとなっている。ここでは平和に関連する代表的な新約聖書の箇所を釈義的に分析することを通して、新約聖書の平和思想の全体像を得ることを試みてみたい。

1．語学的分析

平和を表す代表的なギリシア語名詞はエイレーネー（εἰρήνη）である。この名詞はヘレニズム世界では戦争がない平和な状態を表す基本的な単語として広汎に使用されている（ホメロス『イリ

＊　本稿は2018年２月14日にルーテル学院大学で行われた同大学「第52回教職神学セミナー」でなされた講演内容に加筆訂正を施したものである。

アス』2.797; ヘロドトス『歴史』1.74; クセノフォン『キュロス』3.2.12;『アナバシス』2.6.6; ツキディデス『ペロポネソス戦史』8.3; プラトン『国家』329c; 465b; 575b; アリストテレス『政治学』1333a他多数）[1]。七十人訳聖書では、ヘブライ語シャローム（שלום）の訳語として用いられ、「平和」（民25:12; 士4:17; サム上1:17; 20:42; 29:7; 代上22:9; 箴17:1; 詩122［121］:6, 7, 8; イザ14:30; 26:3, 12; エレ6:14; 12:12; 36:11; エゼ13:10, 16; 34:25）、「平安」（創15:15; 26:29; サム下18:28, 29; エレ41:5）、「繁栄」（士6:23; サム下11:7; 代上4:40; イザ45:7; エレ36:11; ダニ3:98; 詩35［34］:7, 27）、「救い」（代上12:18［17］, 19［18］）等を意味している[2]。

新約聖書においてエイレーネーは主として「平和」という意味で用いられるが（マタ10:34; ルカ12:51; 14:32; ヨハ14:27; 使7:26; 10:36; 14:2; ロマ1:7; 5:1; 14:19; Ⅰテサ1:1; 5:3; エフェ2:17; 4:3; ヘブ11:31）、ヘブライ語シャローム（שלום）の持っている多義的な豊かさを反映して、戦争（πόλεμος）の反対概念として争いがないこととを意味するのみならず、「平安」や「繁栄」の意味にもなる（マコ5:34; ルカ7:50; 8:48; 10:5; 24:36; ヨハ20:19, 21, 26; ヤコ2:16）[3]。

平和に関する基本用語としては、さらに、動詞カタラッソー（καταλλάσσω「和解する」ロマ5:10; Ⅰコリ7:11; Ⅱコリ5:18, 19, 20）とその名詞形カタラゲー（καταλλαγή,「和解」ロマ5:11; 11:15; Ⅱコリ5:18, 19）、派生語のアポカタラッソー（ἀποκαταλλάσσω「和

1 LSJ, 490; *The Brill Dictionary of Ancient Greek*（以下、*BDAG*と略す）, 608–609; W. Foerster, “Der griechische Begriff von εἰρήνη,” *TWNT* 2.400–402を参照。.

2 W. Foerster, “εἰρήνη in der LXX,” *TWNT* 2.406–8; E. Dinkler, “Friede,” *RAC* 8.454–455を参照。

3 Bauer-Aland, 457–459; W. Foerster, “εἰρήνη im NT,” *TWNT* 2.406–8; V. Hasler, “εἰρήνη,” *EWNT* 1.957–964; W. M. Swartley, “Peace in the NT,” *NIDB* 4.422; O. Schnübbe, *Der Friede*（*shalom*）*im Alten und Neuen Testament – eine notwendige Korrektur*（Hannover: Lutherisches Verlagshaus, 1992）28–29を参照。

解する」コロ１:20, 22; エフェ2:16）とが挙げられる。和解は紛争の解決がもたらす関係の回復を意味するのであるから、平和の実現と密接な関係にある（ロマ5:1を参照）。

カタラッソーとその関連語は交換することを基本的語意としているが、敵対関係を友好関係に替えることとして、ギリシア・ローマ世界において互いに戦っていた当事者間の和解を表す外交用語としても用いられている（ヘロドトス『歴史』1.61; 5.29; 6.108; 7.145; クセノフォン『アナバシス』1.6.1; ツキディデス『戦史』4.49.4; ヨセフス『ユダヤ古代誌』14.278; フィロン『徳論』117–118, 153）[4]。これらの言葉はヘレニズム・ユダヤ教文献において神と人との和解について転用され、重要な神学用語となった（Ⅱマカ1:5; 5:20; 7:33; 8:29; ヨセフス『ユダヤ古代誌』3.315; 6.143, 151; 7.153, 295; 『ユダヤ戦記』5.415; フィロン『賞罰』167; 『モーセの生涯』Ⅱ 166）[5]。

カタラッソーとその関連語は、新約聖書ではパウロ書簡や第二パウロ書簡に集中して出て来る（ロマ5:10, 11; 11:15; Ⅰコリ7:11; Ⅱコリ5:18, 19, 20; コロ1:20, 22; エフェ2:16）[6]。パウロの用法は神学的であり、これらの言葉は主として神と人との和解の出来事に対して用いられているが（ロマ5:10, 11; Ⅱコリ5:18, 19, 20; さらに、コロ1:20, 22; エフェ2:16を参照）、人と人の和解についても適用例がある（Ⅰコリ7:11）。

---

4 LSJ, 899; BDAG, 1062; C. Breytenbach, *Versöhnung: eine Studie zur paulinischen Soteriologie* (WMANT 60; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989) 61–65を参照。

5 Bauer-Aland, 841; H. Merkel, “καταλλάσσω κτλ.,” *EWNT* 1.645–646; Breytenbach, 69–78; M. Wolter, *Rechtfertigung und zukünftiges Heil: Untersuchung zu Röm 5,1–11* (BZNW 43; Berlin: de Gruyter, 1978) 39–45; C. Constantineanu, *The Social Significance of Reconciliation in Paul's Theology: Narrative Readings in Romans* (LNTS 421; London: T & T Clark, 2010) 26–28を参照。

6 Bauer-Aland, 185, 841;F. Büchtel, “καταλλάσσω κτλ.,” *TWNT* 1.252–260; H. Merkel, “καταλλάσσω κτλ.,” *EWNT* 1.644–650を参照。

2．イエスの教えにおける平和

2.1　平和を創り出す者の幸い

「幸いである、平和を創り出す者たち。彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタ5:9）[7]。

イエスは山上の説教冒頭で展開される幸いの教えにおいて、弟子たちに平和を創り出すような生き方を勧める。山上の説教における九つの幸いの宣言は、現在は様々な苦難や欠乏状態にある人々に対して、来たるべき神の国における運命の逆転と究極的幸いを語っている。第七の幸いの宣言において、イエスは平和を創り出す生き方をする者たちの究極的な幸いを宣言することによって、「神の子と呼ばれる」に相応しい、平和を創り出す生き方へと招きを与えている[8]。

平和を創り出す者たち（εἰρηνοποιοί）の幸いを告げるこの言葉は、箴10:10（七十人訳）にヒントを得ている。箴10:10（七十人訳）には、「平和を創り出す者たち」という名詞句は出て来ないが、はっきりと諌める者が「平和を創り出す（εἰρηνοποιεῖ）」ということが動詞句を用いて述べられている（コロ1:20を参照）。

この幸いの宣言の後半部は（マタ5:9b）、「平和を創り出す者たち」が神の子らと呼ばれることを述べており、イスラエルの民が

7　本稿における聖書翻訳は、特別に断らない限り、ネストレ＝アラント28版に基づいた原典からの私訳である。

8　この節の詳しい釈義的分析については、W. D. Davis/D. Allison, *The Gospel according to Saint Matthew*（vol.1; ICC; Edinburgh: T. & T. Clark, 1988）457–459; H. D. Betz, *The Sermon on the Mount*（Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 1995）137–142; U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*（EKK I/1; 5. völlig neubearbeitete Aufl.; Zürich:Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002）287–288; 原口尚彰『幸いなるかな：初期キリスト教のマカリズム（幸いの宣言）』新教出版社、2011年63頁を参照。

「生ける神の子ら」と呼ばれることを約束するホセアの預言を思い起こさせる（ホセ2:1; ロマ9:26を参照）。イエスは旧約聖書の言葉を素材としながらそれを越えて、神の国の到来に相応しい新しい生き方を明確に示していると言える（マタ5:45も参照）。当時の地中海世界全体の思想傾向を考えると、ローマ皇帝ら政治的支配者が世界の平和を創り出すとされるギリシア・ローマ世界の通念（ディオ・カッシオス『ローマ史』44.49.2）に対して、真の平和を創り出すのはイエスの教えに従う者たちであることをこの宣言が主張している点が際立っている。

平和を創り出すことは実践的な課題であるので、それをどのように実現するかが問題となる。平和の反対が紛争や争いであり、それが国家レベルにまで昂じると戦争となる。人と人との関係において、紛争解決の手段としてイエスは徹底して和解すること（マタ5:23-25）、人を赦すこと（6:12-15; 18:21-35）を勧め、復讐を禁じ（5:38）、敵を愛することを求めており（5:44）、悪に対して復讐することや、力によって抑止することや、抵抗することを認めていない[9]。福音書の物語を読み進めると、イエス自身がこの教えを実践し、罪人の赦しのために自らのいのちを捧げたことが分かる（マコ10:45; ロマ5:17-18; Ⅰコリ15:3を参照）。

三世紀頃までキリスト教徒は、イエスの教えを文字通りに守って武器を取らず、戦争には加わらなかった。後66-73年のユダヤ戦争の際にも、イスラエルのユダヤ人の多数の行動には与せず、反ローマの武装蜂起に加わらず、ヨルダン川対岸のペラに避難した（エウセビオス『教会史』3.5.3を参照）。当時のキリスト教徒はユダヤ人世界においても、異邦人世界においても社会の少数者であり、社会全体の体制を支える役割はなく、イエスの教えを信仰者個人に向けられた宗教的・倫理的教えとして純粋に守ろうと

9　Betz, 138-139を参照。

していたと言える。

2.2　隣人愛と愛敵

「あなた方も聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎みなさい』と命じられている。しかし、私は言う。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなた方の天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、義人にも不義なる者にも雨を降らせている。自分を愛する者を愛したところで、あなた方にどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人たちでさえ、同じことをしているではないか。だから、あなた方の天の父が完全であるように、あなた方も完全な者となりなさい」（マタイ5:43–48; さらに、ルカ6:27–28, 32–36を参照）。

イスラエルには旧約聖書の時代から隣人愛の戒めが存在した（レビ19:18）。民族同胞である隣人を愛することは、イスラエル共同体に属する人々が守るべき基本的規範であり、旧約聖書の戒めを総括する基本的な戒めである。しかし、この戒めには民族共同体という限界があり、他の民族との関係を律するものではなかった。イスラエルの歴史を振り返ると、ユダヤ民族は古来様々な周辺民族と対立し、戦争になることも多かった。民族主義的な主張が争いや戦争を引き起こす原因となることは、この民族の歴史が雄弁に語っている。

イエスは律法の精神の総括として隣人愛を説く一方で（マルコ12:28–34; ルカ10:25–28）、それを越えた愛敵の教えを語った（マタイ5:43–48; ルカ6:27–28, 32–36）。福音書に保存されているイエスの愛敵の教えにおいては、愛の対象は、互いに愛し合う共同体

内に限定されず、敵対する人々にも向けられている（マタ5:43-48; ルカ6:27-36）。敵対する者の不幸を喜ばず（箴24:17-18）、むしろ親切にするように勧める助言は旧約聖書に散見される（出23:4-5; 箴25:21-22）[10]。しかし、旧約聖書では「目には目を」、「歯には歯を」、「命には命を」という応報原理（lex talionis）が支配的であり（出21:23-25; レビ24:19-21; 申19:21）、重大な危害を加えた者に対して復讐することは当然の権利とされていた（出21:12-14; 民35:26-27; 申19:11他）[11]。さらに、イエスと同時代のユダヤ教においても敵を愛するように勧める発言は見られない。応報の原理や相互性の原理を越えた愛敵の教えは、イエス特有の教えであり、他には見られない初期キリスト教のエートスを形成していた[12]。

「敵を愛し、迫害する者のために祈る」ことは、自分たちに対して好意を持たず、積極的に敵対行動を取る人々を愛することを意味する。このことは、人間が自然に抱く感情に反しており、実践が困難なことであるが、善人にも悪人にも自然の恵みを等しく与えて養い給う天の父なる神の寛容さに倣うことになる（マタ5:45）。山上の説教の第六反対命題では、「だから、あなたがたの天の父が完全（τέλειος）であるように、あなたがたも完全な者となりなさい」という言葉が結論として語られている（マタ5:48）。

---

10 J. Piper, *Love your Enemies*（Wheaton, IL: Crossway, 1979）27-33; Betz, 307, 310を参照

11 D. J. Weaver, “Transforming Nonresistance: From Lex Talionis to ‘Do not Resist the Evil One’ ,” in *The Love of Enemy and Nonretaliation in the New Testament*（ed. W. M. Swartley; Louisville, KT: Westminster/J. Knox, 1992）37-42を参照。

12 Piper, 89-91, 100-139; Betz, 309-313; Luz, 403; A. Janzen, *Der Friede im lukanischen Doppelwerk vor dem Hintergrund der Pax Romana*（New York: Peter Lang, 2002）157; W. M. Swartley, *Covenant of Peace: The Missing Peace in New Testament Theology and Ethics*（Grand Rapids: Eerdmans, 2006）58.

イエスに従う者が神のように完全な存在になることは不可能であろうが、神の寛容に顕された完全性に倣う努力をすることは出来る[13]。それは敵対する者たちも自分たちと同じ人間であり、かけがえのない存在として神の愛は彼らの上にも注がれていることを知り、彼らのために祈ることに他ならない。尚、パウロ書簡や使徒教父文書にも同様な愛敵の教えの反映が見られるが（ロマ12:14; ディダケー1:3; Ⅱクレメンス13:4）、実行の不可能性についての議論は見られない[14]。

3．ルカ文書における平和:平和の主イエス

「天使は彼らに言った。『恐れるな。見よ、あなたがたに民全体の大きな喜びを告げる。今日、私たちのためにダビデの町に救い主が生まれた。その方はキリストなる主である』」（ルカ2:10-11）。

「栄光がいと高きところで神に
地上では御心にかなう者の間に平和（があるように）」（ルカ2:14）。

「祝福されている、来たるべき方、主の御名による王は
天に平和そして栄光がいと高きところに（あるように）」（ルカ19:38）。

イエスが地上に平和をもたらす救い主であることは、ルカ福音書が伝える降誕物語において既に告げられている（ルカ1:78-79;

13　Luz, 409-410を参照。
14　Luz, 410-412もこの点に注目している。

2:11, 14, 29–32)。ベツレヘムにおける幼子イエスの誕生は、旧約聖書においてイザヤが語った平和の王の預言の成就とも言うべき出来事であった（イザ9:5–6; 11:1–10)。イエスの両親のベツレヘムへの旅は、初代皇帝アウグストゥスの人口調査の勅令に端を発したとされている（ルカ2:1)。ローマ帝国は圧倒的な武力により敵対勢力を平定することを通して、ローマ人が考える平和な世界秩序を樹立していた（アウグストゥス『業績録』12,13; タキトゥス『年代記』1.4.1; リヴィウス『ローマ建国史』1.31.7; 3.2.2; 5.27.15; オヴィウス『変身物語』15.832他)[15]。使24: 2 ではローマ総督フェリクスの前で大祭司の立場を代弁してパウロを告発する弁論家テルティロの言葉の中に、ローマによって与えられた平和に関する言及がある[16]。

イエスが来たらす平和は力による平和ではない。イエスは神の国の福音を語り（ルカ4:43; 8:1; 18:29; 21:31他)、人々に対して愛に生きることを勧めることを通して、人と人が争うことがなく、互いに赦し合って生きる平和な世界を実現しようとした。地上で実現される神の国の平和のイメージは、ナザレの会堂でイエスが朗読したイザヤ61:1–2によって、様々な圧迫や拘束や苦難からの解放の時として表現されている（ルカ4:18–19)[17]。イエスはガリラヤにおける宣教活動を通して人々の間で「平和の福音」を語ったと総括される（使10:36)。さらに、主によって世に遣わされた

15 「ローマの平和」の政治的・軍事的性格について詳しくは、E. Dinkler, “Friede,” *RAC* 8. 442–444; K. Wengst, *Pax Romana and the Peace of Jesus Christ*（London:SCM, 1987）7 –54; Schnübbe, 14–17; Janzen, 35–70, 97 – 131, 165 – 196; M. Reasoner, “Paul’s God of Peace in Canonical and Political Perspectives,” in *The History of Religions School Today*（eds. T. R. Blanton IV/R. M. Calhoun/C. K. Rothschild; WUNT 340; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2014）15–17を参照。

16 Janzen, 30もこの点に注目する。

17 Janzen, 132–138.

弟子たちは託された宣教活動を通して、人々に神の国の平和をもたらす務めを帯びていた（ルカ10:5-6, 9; マタ10:13を参照）。こうした非暴力的な手段による平和の実現は、軍事力による征服や威嚇に支えられた「ローマの平和（Pax Romana）」とは対照的である[18]。

イエスのエルサレム入城に際して、オリブ山に一行が差し掛かった時に弟子の群れが神を讃美して、「祝福されている、来たるべき方は、主の御名による王は。天に平和、そして栄光がいと高きところに（あるように）」と歌ったとされている（ルカ19:38; 詩118［117］:26を参照）。この讃歌の後半は、降誕物語の際に天の軍勢が歌った讃歌に対応しているが、ルカ2:14のように地上における平和が祈り求められるのではなく、天の平和が神の栄光と共に讃えられている。これは王なるキリストの受難と復活に向かう歩みが、天における平和と神の栄光を顕すものとなることを示している。イエスは苦難を通して神の救いの計画を成就し、神の子の栄光に入ることになるのであるが、それは信仰の目にのみ明かである（ルカ24:25-26を参照）[19]。

---

18 Janzen, 76-78; **A. Strobel,** "Die Friedenshaltung Jesu im Zeugnis der Evangelien - christliches Ideal oder christliches Kriterium?" *ZEE* 17（1973）97-106; R. E. Brown, *The Birth of the Messiah*（Garden City, NY: Doubleday, 1977）415; F. Bovon, *Lukasevangelium*（Teilband 1; EKK ⅡⅠ/1; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989）117-118.

19 H. Baalink, "Friede im Himmel: Die lukanische Redaktion von Lk 19,38 und ihre Deutung," *ZNW* 76（1985）171-186; F. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke X-XXIV*（AB28A; New York: Doubleday, 1985）1251; U. Mauser, *The Gospel of Peace: A Scriptural Message for Today's World*（Louisville, KT: Westminster/John Knox, 1992）49; J. Nolland, *Luke*（Volume 2; WBC 35C; Dallas: Word Books, 1993）927; D. L. Bock, *Luke*（Vol. 2; Grand Rapids: Baker, 1996）1558-1559; F. Bovon, *Lukasevangelium*（Teilband 4; EKK ⅡⅠ/4; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2009）33-34を参照。

４．パウロにおける平和の主題

4.1　神が与える平和

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように」
（ロマ1:7;Ⅰコリ1:3;Ⅱコリ1:2;ガラ1:3;フィリ1:2;フィレ1:3）。

「平和が彼らの上に、憐れみが神のイスラエルの上に（あるように）」（ガラ6:16）。

「平和の神があなたがたすべてと共に（おられるように）」（ロマ15:33）。

「平和の神があなたがたと共に（おられるように）」（フィリ4:9）。

「愛と平和の神があなたがたと共に（おられるように）」（Ⅱコリ13:11）。

「平和の神自身があなた方全体を聖化されるように」（Ⅰテサ5:23）。

「平和の神がサタンをあなたがたの足下に速やかに砕くであろう」（ロマ16:20）。

上に記した箇所が示すように文言に多少のヴァリエーションはあるものの、パウロ書簡の多くは導入部と結びの部分に、神より与えられる平和を祈り求める典礼的な定型句を置くのが慣例であり、神の平和の主題が、各書簡全体を包み込む形になっている。

導入句では「神よりの平和」が願い求められる（ロマ1:7; Ⅰコリ1:3; Ⅱコリ1:2; ガラ1:3; フィリ1:2; フィレ1:3）[20]。結びの句では「平和の神」という表現が好んで使用され、その臨在が祈り求められている（ロマ15:33; 16:20; Ⅱコリ13:11; Ⅰテサ5:23フィリ4:9）[21]。世界平和を実現する究極的主体はローマ皇帝ではなく神であり、平和は神からの贈り物であるということが繰り返し確認されることになる[22]。

4.2　神と世界の和解

「信仰によって義とされたのだから、私たちは主イエス・キリストを通して神との平和を得ている。主を通して私たちは信仰においてこの恵みに入り、その中に立ち、神の栄光の希望を誇っているのである。それだけではなく、私たちは患難をも誇る。それというのも、私たちは知っているのである、艱難は忍耐を、忍耐は確証を、確証は希望を生み出すことを。希望は恥かしめることはない。神の愛が私たちに付与されている聖霊によって私たちの心に注がれているからである。

　それというのも、私たちがまだ弱いときに、時に従い、キリストが不敬虔な者たちのために死んだのである。義人のためにさえ死ぬ者は稀である。善人のためなら、進んで死のうとする者が多分あるかも知れない。私たちがまだ罪人であった時に、

20　これは手紙の冒頭に平和を祈る言葉を入れる、ヘレニズム・ユダヤ教の書簡定型をキリスト教化して取り入れたものであろう（Ⅱマカ1:1; 3:1を参照）。

21　特に、ロマ16:20に関しては、D. R. Brown, “The God of Peace will Shortly Crush Satan under your Feet: Paul’s Eschatological Reminder in Romans 16:20a,” *Neot* 44（2010）1–14を参照。

22　Breytenbach, 144–145は、平和の実現に関して聖霊の働きを強調する（ロマ14:17; ガラ5:22）。

キリストが私たちのために死ぬことによって、神は私たちに対する自らの愛を示しているのである。それどころか、今やその血により義とされているのだから、私たちはキリストを通して怒りから救われるであろう。もし、敵であったときに御子の死を通して神と和解したのならば、尚更のこと、和解している者としてキリストのいのちによって救われるであろう。それだけではなく、私たちの主イエス・キリストを通して神を誇っている。私たちはキリストを通して和解を得ているのである」（ロマ5:1-11）。

「すべては私たちをキリストを通して自身と和解させ、私たちに和解の務めを与えた神より（来ている）。キリストにあって神は世界を自身と和解させ、彼らの罪過を勘定に入れず、私たちの内に和解の言葉を与えた」（Ⅱコリ5:18-20）。

パウロはキリスト教宣教者であり、軍事力を行使して国を外敵から守ることや、国内の秩序を守るような立場にはなかった。武力によって秩序を維持し、犯罪者を罰することは、神によって立てられた「上なる権威」である政治権力の使命であった（ローマ13:1-7）。当時の地中海世界はローマ帝国の支配下にあり、「上なる権威」とは具体的にはローマ皇帝やその命を受けた総督等の政治権力のことを意味した[23]。熱心なユダヤ教徒の中には、異邦人の支配者を神に立てられた者ではないと考える者もいたが、パウロは異邦人支配者も秩序維持のために神が立てたものであると考え、その支配の正統性を認めていた。

パウロの関心事は異邦人の政治的支配を打破することではな

23　R. Jewett, *Romans*（Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 2007）787-788を参照。

く、ユダヤ人に対しても異邦人に対してもキリストの福音を語り、キリストを信じる信仰を通して救いへと招くことであった（ロマ1:16–17）。パウロの神学的思考において、平和とは人と人との間に争いがないことに留まらず、神と人の間に和解と平和が樹立することを意味している。パウロの認識によれば、人間の罪によって神と人との関係が壊れ、敵対関係が生じている（ロマ5:10; 8:7）[24]。しかし、キリストの死は人間の罪を取り除いて、神と人との間の和解と平和をもたらした（ロマ5:1, 6）。和解の出来事は人間の努力によるのではなく、神の業として与えられている[25]。人間は全く受け身であり、神の愛を示すキリストの死により罪赦され、義とされることによって神との和解を得て、終末時に示される神の怒りより救われる希望を持つこととなる（ロマ5:9–11）[26]。つまり、神との平和は信仰者の救いの希望の根拠であり、神と人との平和の基礎の上に、人と人との和解と平和も成立することになる。

神との和解に与るためにはキリストの死と復活の使信を聞いて信じることが前提になっている。ユダヤ人が福音を受け入れなかったことは、福音が異邦人に対して宣べ伝えられ、回心者が生まれる機縁となった（ロマ11:24）。イスラエルは神の民として選ばれ、約束と契約を与えられたが（9:1–5）、キリストの福音の言葉に対して心を閉ざして受け入れないために福音の敵となっている（11:28）。彼らは律法を守って自分の義を立てることに熱心だっ

24　ロマ5:1–11の詳しい釈義的分析については、Wolter, 35–200; Jewett, 344–368; U. Wilckens, *Der Brief an die Römer*（Teilband 1: EKK ＶＩ/1; 2. verbesserte Aufl.; Zürich:Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1987）285–306; J. D. G. Dunn, *Romans 1–8*（WBC 38A; Dallas: Word, 1988）244–269; 原口尚彰『ローマの信徒への手紙　上巻』新教出版社、2016年、171–183頁を参照。

25　Breytenbach, 154–155.

26　Breytenbach, 155はロマ書においては第二コリント書とは異なり、キリストの仲介者としての役割に焦点が当たっていることに注目している。

たために義に達しなかったのに対して、異邦人の人々は使信を信じることを通して義とされ、救いに与ることが出来た（9:31–32; 11:11）。「彼ら（ユダヤ人）の廃棄は世の和解となった」のであった（ロマ11:15a）。しかし、ユダヤ人の廃棄は究極的ではなく、彼らには回心して救いに与る可能性は残されている（11:25–32）。終末時における彼らの回心と救いは、不信から信仰へ、死から命への移行を意味するので、「死からの甦り」に等しいと言える（11:15b）。

Ⅱコリ5:18–20は、神と人との和解の出来事が、神がイニシアティブを取り、キリストを通してなされた神の業であることと（5:18a）、神との和解を与えられた者が同時に和解の務めを与えられていることを強調している（5:18b, 19）[27]。「和解の務め」（5:18b）とはパウロら宣教者が、神から託された「和解の言葉」（5:19）である福音を人々の間で宣べ伝えることを通して敵対関係を解消し、神と人との間に和解と平和をもたらすことを指している[28]。パウロはキリストから委託を受けた代理人として、手紙

27 Breytenbach, 133–142, 178–180を参照。 尚、Constantineanu, 65–73; S. Kim, "2 Cor. 5:11–21 and the Origin of Paul's Concept of 'Reconciliation'," *NovTest* 34（1997）360–384は、パウロの和解についての発言の背後に、彼の回心体験の反映を見ようとするが、パウロの言葉自身にはそのような含意はない。

28 Ⅱコリ5:16–21の詳しい釈義的分析については、V. P. Furnish, *Ⅱ Corinthians*（AB32A; Garden City, NY: Doubleday, 1984）329–353; R. P. Martin, 2 *Corinthians*（WBC40; Dallas: Word, 1986）134–159; R. Bultmann, *Der zweite Brief des Paulus an die Korinther*（KEK Sonderbnd; hrsg. v. E. Dinkler; 2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987）155–167; C. Wolff, *Der zweite Brief des Paulus an die Korinther*（THKNT 8; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1989）123–137; M. Thrall, *The Second Epistle to the Corinthians*（ICC; vol.1; Edinburg: T&T Clark, 1994）412–449; E. Gräßer, *Der zweite Brief des Paulus an die Korinther: Kapitel 1,1–7,6*（ÖTKNT 8/1; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2002）217–236; G. H. Guthrie, 2 *Corinthians*（BECNT; Grand Rapids: Baker, 2015）306–315を参照。

の受信人であるコリント人たちに対して、使信を受け入れて神との和解に与るように強く勧めている（5:20を参照）[29]。

4.3　人と人との間の平和

4.3.1　兄弟愛と平和

「すべての人々の前に良いことを配慮し、もしあなた方に可能ならば、すべての人々と平和に過ごしなさい」（ロマ12:8）。

「神の国は食べ物や飲み物ではなく、義と平和と聖霊における喜びである。このことにおいてキリストに仕える者は神に喜ばれ、人々に対して確証されている。平和の事や互いに建設的なことを私たちは求めている」（ロマ14:17-19）。

パウロは倫理的勧告において、神と人との和解の事実を踏まえた上で、信徒たちが他の人々と平和に過ごすように勧めている（ロマ12:18; 14:17-19）[30]。パウロは愛についての教えの一環として平和の勧めを行っており、愛に生きる者の間に真の平和が成立すると考えている（ロマ12:9-21を参照）。愛に生きる者は争いを起こすことが少ないし、もし、行き違いや紛争が起こっても、愛によって相手を赦し、和解する道が開けてくる。ガラテヤ書は倫理的勧告の文脈の中で、自由と愛に生きる者の内に聖霊が働いて実現する徳目の一つに平和を挙げている（ガラ5:22）。そこでパウロの平和の勧めの淵源として、愛の教えを検討する必要が出て来る。

29　Wengst, 84-87は、神との平和に基づく新しい世界への希望が、現存のローマの平和を凌駕する終末論的性格を持つことを強調する。

30　パウロの和解の使信が持つ社会倫理的な側面をSchnübbe, 38-41; Constantineanu, 99-206は強調している。尚、ロマ14:17-19の詳しい釈義的分析については、Dunn, Ⅱ 831-833; Wilckens, ⅡⅠ 93-94; Jewett, 862-866を参照。

パウロは初期キリスト教の伝統に一致して（マコ12:31-34並行を参照）、旧約聖書の隣人愛の規定を（レビ19:18）、他者を愛することを勧める根拠として援用している[31]。十戒をはじめとする律法の倫理的要求は結局のところ隣人愛の実践ということに尽き（ロマ13:9; ガラ5:14）、愛は律法を成就することになる（ロマ13:8-10; ガラ5:13-14）。しかし、罪人である人間が如何にして他者を愛することが出来るのかが問題となる。パウロの神学的思考によれば、人間が隣人を自分のように愛することが出来るのは、罪人のために死んだ御子キリストを通して表された神の愛を受けることによってである（ロマ5:8）。人間の愛は神の愛の基盤において成立し、実行可能なものとなる。神の愛は聖霊を通して人間の心に注がれており（5:5）、何事も人間をキリストの愛から離すことは出来ない（8:39）。

パウロは倫理的勧告の一環として、信徒相互の愛や（ロマ13: 8 ; ガラ5:13; Ｉテサ3:12; 4:9）、兄弟愛（ロマ12:10; Ｉテサ4:9）を勧める言葉を語っている。さらに、Ｉテサ4:9において彼は信徒間の兄弟愛に言及し、信徒たちがそうすべく神によって直接教えられていると述べる。他方、ロマ13:8-9において信徒相互の愛を勧めるパウロの発言は、旧約聖書の隣人愛の規定（レビ19:18）を再解釈して提示する文脈においてなされており（ロマ13:9; ガラ5:14を参照）、キリスト教共同体に属する信徒間の愛を隣人愛の一つの実現形態として捉えていることを示している。パウロは「兄弟」を民族同胞ではなく、キリストを信じる信徒であると理解したので、レビ19:18bの隣人愛の戒めも民族共同体ではなく、信仰共同体である教会に向けられていると理解したのであった。但し、パウロは「お互いの愛」と共に「すべての人への愛」も勧めており（Ｉテサ3:12）、隣人愛は「兄弟」である信徒に向けられるだけではなく、

31　詳しい分析は、「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁を参照。

信仰共同体の外の人々にも及ぼすことが出来ると考えていた。

信徒間の愛は相互性を持っており、互いに愛し合うことを前提としている（ロマ12:10; 13:8; ガラ5:13; Ⅰテサ3:12; 4:9）。相互に愛し合う共同体に属する者として、信徒は互いのことを思いやり、尊重し合って、互いに裁くことをせず躓きを与えないことが求められる（ロマ14:1–23）。パウロは信徒相互の愛を兄弟愛と呼ぶ（ロマ12:10; Ⅰテサ4:9）。信仰に基づく共同体の構成員間の愛情を兄弟愛と呼ぶ用法は、初期キリスト教に固有なものであった。

4.3.2　愛敵

「愛は偽りであってはならない。悪を嫌悪し、善に執着しなさい。互いに兄弟愛をもって慈しみ、尊敬をもって互いに導き合いなさい。熱心さにもとることなく、霊において燃え、主に仕えなさい。希望によって喜び、苦難を忍び、祈りに専念しなさい。聖徒たちの足りないところを分かち合い、旅人をもてなすことを追い求めなさい。迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない。喜ぶ者たちと共に喜び、泣く者たちと共に泣きなさい。互いに一つのことを思いなさい。奢ったことを思わず、身分の低い人々と交わりなさい。賢いと自惚れる者になってはならない。誰に対しても悪に対して悪を報いてはならない。すべての人々の前に良いことを配慮し、もしあなた方に可能ならば、すべての人々と平和に過ごしなさい。愛する者たちよ、自ら復讐することなく、怒りに場所を与えなさい。書かれている通り、『復讐は私に属し、私が復讐する』と主は言われる。むしろ、もし敵が飢えていれば食べさせ、喉が渇いていれば、飲ませなさい。このことを行うことによって、その頭に燃える炭が積まれることになる。悪に負けるのではなく、善によって悪に勝

ちなさい」（ロマ12:9-21）。

冒頭の「愛は偽りであってはならない」（ロマ12:9; Ⅱコリ6:6）という文章がこの部分を貫く視角を提供しており、それに続く様々な倫理的勧告の言葉は（ロマ12:10-21）、偽りのない愛に導かれた者が社会生活の中で取るべき具体的行動を例示している[32]。これらの勧告の一部は、キリスト教徒相互の関係について語っているが（12:9-13）、他の部分は異教徒を含むより広い範囲の人々との関係一般に妥当する勧めとなっている（12:14-20）。特に注目されるのは、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」という勧めである（12:14）。この文章の最初の部分は、イエスの愛敵の教えを伝える福音書伝承（ルカ6:27b-28「あなた方の敵を愛しなさい。あなた方を憎む者たちに良い仕打ちをしなさい。あなた方を呪う者を祝福し、あなた方を憎む者たちのために祈りなさい」; さらに、マタ5:44も参照）の並行伝承を提示している[33]。「迫害する者を祝福する」ことは、一方では、愛の対象を自分を愛してくれる可能性がある家族や仲間だけではなく、自分たちに好意を持たず、積極的に敵対行動を取る人々に対しても広げることを意味する。このことは、裁きは神に委ねて敵対行動に対して報復せず、悪に対して悪を報いないことによって裏付けられる（ロマ12:19-20; さらに、マタ5:38-48; ルカ6:27-36; Ⅰテサ5:15; Ⅰペト3:9; ポリ・フィラ2:2を参照）[34]。そのことを倫理学的な視点から評価すると、「善によって悪に勝つこと」に他ならない（ロマ12:21）。

32　この箇所の詳しい釈義的分析については、Dunn, Ⅱ 736-756; Wilckens, ⅡⅠ 23-28; Jewett, 755-779を参照。
33　Dunn, Ⅱ 744-745.
34　Constantineanu, 161-163を参照。

5．第二パウロ書簡における平和の主題

5.1　十字架の血による平和（コロサイ1:15-20）

「御子は見えない神の似姿、
すべての被造物の中で最初に生まれた者（長子）である。
御子によって万物は創られた。
　天上のものも地上のものも、
　　目に見えるものも、目に見えないものも、
　王座も主権も、支配も権力も、
すべては御子を通して、御子のために創造された。
御子はすべてに先立って存在し、
　すべては御子において成立している。
御子はからだなる教会のかしらである。
御子は初めであり、
　死者の中から最初に生まれた者（長子）であり、
　すべてにおいて先んじる者となった。
（神は）御子に充ち満ちているものが宿ることを望み、
御子を通して万物を御自身と和解させ、
　地上の事柄であろうと、天上の事柄であろうと、
十字架の血を通して平和を創り出した」（コロ1:15-20）。

コロサイ書はＩコリント書やガラテヤ書の十字架論を出発点に取りつつ（Ｉコリ1:18-25; ガラ3:1-5）、キリストの十字架の血による万物と神との和解という宇宙的規模の十字架論を展開する（コロ1:20）[35]。著者はキリスト讃歌の前後に付した解釈句の中で、信徒が神の子キリストの死を通して贖いと罪の赦しを受けている

35　詳しくは、原口尚彰「十字架の血による平和:コロサイ1:9-23の釈義的・神学的研究」『ルーテル学院研究紀要』第50号、2016年、43-56頁を参照。

ことを述べる（1:14, 22）。人間は思いと言葉と行いを通して神に離反し、その結果、全被造世界が神との敵対関係に陥っている（1:21; さらに、ロマ1:19-22を参照）。神と人間との関係を回復し、世界に和解と平和をもたらすためには、罪が贖罪の業によって取り除かれ、神が人間の罪を赦すということが不可欠であった（マタ6:12; 26:28; ルカ24:47; 使2:38; 5:31; 13:38; ロマ5:1-11; エフェ1:7を参照）。

5.2　心の変革による平和

真の平和は担い手である人間の心の変革と密接不可分であり、人間の心の中にある不信や敵意を克服し、愛の関係が築かれるときに、現実の平和は可能となることをエフェソ書の次の言葉は示している。

> 「彼（キリスト）こそが私たちの平和であるからである。彼は二つのものを一つにし、自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律からなる律法を廃棄した。双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼすためである。彼はやって来ると、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和を宣べ伝えた。彼を通して私たち双方が一つの霊において父のもとに近づくことが出来るからである」（エフェ2:14-18）。

エフェ2:14-18はロマ5:1-11; Ⅱコリ5:18-20; コロ1:20-23に述べられている和解論を継承・発展させて、キリストの十字架が異邦人とユダヤ人の間の隔ての壁である律法を無効とすることによって、相互の敵意を取り除き、「遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも」、和解と一致をもたらす出来事であったことを強調している（イザヤ57:19を参照）[36]。和解した異邦人

信徒とユダヤ人信徒は共に一致して神との和解に与り、神のもとに近づくことが出来る（エフェ2:16, 18）。初期のキリスト教会は既に民族の壁を越えて広がり、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、キリストを信じる者は等しく神の子とされた（Ⅰコリ12:13; ガラ3:6-14; 3:28）。しかし、民族的帰属や文化的伝統や生活習慣の差を超えたキリストにおける真の一致を実現するためには、信徒たちの心の中にある相互不信や敵意を取り除くことが必要であった。

5.3　霊的戦い

エフェソ書は、信徒たちに、「私たちの知性の霊において新たにされて、神に倣って義と清い真理において造られた新しい人を身に着けなければならない」と勧めている（4:23-24）。新しくされた者は、真実を語り（4:25）、愛に歩むことが期待される（5:1-2）。しかし、世界には悪の力が残存し、人の心に働きかけて神の御心に適わない悪を行うように唆しているのも事実である。そのような中で、真理と愛に歩もうとすることは、不断の戦いとして意識される。次の言葉は、信徒たちが経験する日常生活における霊的戦いに言及している。

36　この箇所の詳しい釈義については、J. Gnilka, *Der Epheserbrief*（HTKNT 10; Freiburg I.B.: Herder, 1982）138-147; R. Schnackenburg, *Der Brief an die Epheser*（EKK X; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982）112-120; A. T. Lincoln, *Ephesians*（WBC 42; Dallas: Word, 1990）139-150; E. Best, *A Critical and Exegetical Commentary on Ephesians*（ICC; Edinburgh: T & T Clark, 1998）247-273; T.-L. N. Yee, *Jews, Gentiles and Ethnic Reconciliation: Paul's Jewish identity and Ephesians*（SNTSMS 130; Cambridge: Cambridge University Press, 2005）126-189; G. Sellin, *Der Brief an die Epheser*（KEK 8; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2008）208-230; F. Thielman, *Ephesians*（BECNT; Grand Rapids: Baker, 2010）161-176; C. E. Arnold, *Ephesians*（ZECNT; Grand Rapids: Zondervan, 2010）147-166を参照。

「最後に、主とその偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対して抗すことが出来るように、神の武具を身に着けなさい。私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配と権威、この暗闇の世界の支配者、天上の悪の諸霊に対するものなのである。だから、悪い日にあっても悪に抗して立ち、すべてを成し遂げることが出来るように、神の武具を取りなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義の胸当を着け、平和の福音の備えの履き物を足に履きなさい。とりわけ、信仰の盾を持ちなさい。それによって、悪い者の放つ火矢をことごとく消すことが出来る。また、救いの兜をかぶり、霊の剣、即ち、神の言葉を取りなさい」（エフェソ6:10-17）。

悪の力に負けないために、神の武具として真理と正義と福音を語る備えが列挙される一方で、信仰が身に着けるべき防具として挙げられ、積極的に戦うために神の言葉が霊の剣として挙げられている[37]。このような霊的戦いを遂行するためには、絶えず目を覚まして祈り続けることが必要とされている（エフェソ6:18-20）。戦いのメタファーの使用は既にイザヤ書に見られ（イザ59:17-18; 知5:17-20を参照）、パウロも信徒の霊的戦いの勧めに援用している（ロマ6:13; 13:12; Ⅱコリ6:7; 10:4; Ⅰテサ5:8を参照）[38]。エフェソ書はパウロよりも装備についてさらに克明な語り方をしているが、これは読者の間に存在する同時代のローマの兵士の装備と戦闘行為のイメージを前提にして、それを信徒の霊的な戦いの描写に転用したものであろう[39]。初期のキリスト教徒は平和に生きる

37　この箇所の詳しい釈義については、Gnilka, 303-314; Schnackenburg, 272-287; L I ncoln, 429-451; Best, 589-604; Sellin, 472-484; Thielman, 415-431を参照。

38　Gnilka, 313; Sellin, 479-484を参照。

39　Best, 587, 601も同趣旨。

者として現実の戦争において武器を取ることを放棄しているが、平和の実現を妨げる悪の力に対する心の内なる霊的戦いには招かれていることになる。

6．結論

新約聖書ではイエスの生き方と教えを通して平和ということが強く語られ、平和思想は初期キリスト教の基本的な行動原理となっている（マタイ5:9他）。紛争解決の手段としてイエスは和解すること（5:23-25）、人を赦すこと（6:12-15; 18:21-35）を勧め、復讐を禁じ（5:38）、敵を愛することを求めている（5:44）。イエスの平和主義的は、徹底して非暴力であり、応報原理や民族共同体の限界を越えた普遍性を持つことにその特色がある。

パウロは平和の概念を神学的に考察し、神と人との和解と平和の基礎の基にして人と人との平和の課題を論じている（ロマ5:1-11）。宣教者は神から「和解の言葉」を語る「和解の務め」を託されている神の使者に他ならない（Ⅱコリ5:18-19）。彼はさらに倫理的勧告において、信徒たちに他の人々と平和に過ごすように勧めている（ロマ12:18; 14:17-19）。彼は愛についての教えの一環として平和の勧めを行っており、愛に生きる者の間に真の平和が成立すると考えている。パウロは教会指導者として信徒相互の兄弟愛を勧めると同時に（ロマ12:10; Ⅰテサ4:9）、愛敵の教えを説き、共同体外の人々を愛することも視野に置いている（ロマ12:9-21）。

エフェソ書は、キリストの十字架が、人間の心の中にある不信や敵意を克服し、神と人との和解と平和、人と人との間の一致を可能としたことを強調する（エフェソ2:14-17）。

他方、心の中で悪や罪と戦う霊的戦いは、倫理的教えの中でしばしば繰り返されている（ロマ6:6; 13:12; エフェソ2:14-18他）。初期のキリスト者はイエスの教えを守って武器を取って戦うことは決してしなかったが、信仰を守るために心の内なる戦いを続け

ていたと言える。

【参考文献】

邦語文献

ハンス・シュミット（南善衛訳）『平和』新教出版社、1973年

ウィラ・ド・M・スワートリー『平和の契約：平和の聖書神学的理解』東京ミッション研究所、2006年

辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年

土屋博「平和」『新共同訳聖書事典』536-537頁

H・E・テート『平和の神学』新教出版社、1984年

パウル・ティリッヒ（芦品定道監訳）『平和の神学』新教出版社、2003年

原口尚彰『地球市民とキリスト教』（改訂版）キリスト新聞社、2006年、73-78頁

同『幸いなるかな：初期キリスト教のマカリズム（幸いの宣言）』新教出版社、2011年

同「十字架の血による平和：コロサイ1：9-23の釈義的・神学的研究」『ルーテル学院研究紀要』第50号、2016年、43-56頁

同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第１号、2016年、21-42頁

同『ローマの信徒への手紙　上巻』新教出版社、2016年

G・フリッツアー（小田島太郎訳）「平和」『旧約新約聖書大事典』1042頁

外国語文献

（注解書は当然の前提なので除く）

Baalink, H. “Friede im Himmel: Die lukanishce Redaktion von Lk 19,38 und ihre Deutung,” *ZNW* 76 (1985) 171-186.

Betz, H.D. *The Sermon on the Mount* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 1995).

Biener, W./H. Klement. *Krieg, Kriegsdienst und Kriegsdienstverweigerung nach der Botschaft des Neuen Testaments mit dem Artikel von Herbert H. Klement » Krieg und Friede im Alten Testament «* (Eras.net, 2018).

Brandenburger, E. *Frieden im Neuen Testament* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1975).

Breytenbach, C. *Versöhnung: eine Studie zur paulinishcen Soteriologie* (WMANT 60; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989).

Brown, D.R. “The God of Peace will Shortly Crush Satan under your Feet:

Paul's Eschatological Reminder in Romans 16:20a," *Neot* 44 (2010) 1–14.
Brown, R.E. *The Birth of the Messiah* (Garden City, NY: Doubleday, 1977).
Campbell, W.S. "Unity and Diversity in the Church: Transformed Identities and the Peace of Christ in Ephesians," *IBS* 27 (2006) 4–23.
Constantineanu, C. *The Social Significance of Reconciliation in Paul's Theology: Narrative Readings in Romans* (LNTS 421; London: T & T Clark, 2010).
Delling, G. "Frieden IV. Neues Testament," *TRE* 11.613–618.
Dinkler, E. "Friede," *RAC* 8.434–506.
Furnish, V. *The Love Command in the New Testament* (Nashville, TN: Abingdon, 1972).
Hasler, V. "eivrh,nh," *EWNT* 1.957–964.
Janzen, A. *Der Friede im lukanischen Doppelwerk vor dem Hintergrund der Pax Romana* (New York: Peter Lang, 2002).
Kim, S. "2 Cor.5:11–21 and the Origin of Paul's Concept of 'Reconciliation'," *NovTest* 34 (1997) 360–384.
Klassen, W. "Peace (New Testament)," *ABD* 5.207–212.
_____. *Love of Enemies: The Way to Peace* (Philadelphia: Fortress, 1984).
Keazirian, E.M. *Peace and Peacemaking in Paul and the Greco-Roman World* (New York: Peter Lang, 2013).
Kraus, C.N. *The Jesus Factor in Justice and Peacemaking* (Telford, PA: Cascadia, 2011).
Kreitzer, L.J. "The Messianic Man of Peace as Temple-builder: Solomonic Imagery in Ephesians 2.13–22," in idem., *Hierapolis in the Heavens: Studies in the Letter to the Ephesians* (LNTS 368; London: T & T Clark, 2007) 107–132.
Lienemann, W. "Frieden," *EKL* 1.1372–1382.
Mauser, U. *The Gospel of Peace: A Scriptural Message for Today's World* (Louisville, KT: Westminster/John Knox, 1992).
Neville, D.J. "Toward a Teleology of Peace: Contesting Matthew's Violent Eschatology," *JSNT* 30 (2007) 131–161.
_____. "The Second Testament as a Covenant of Peace," *BTB* 37 (2007) 27–35.
Piper, J. *Love Your Enemies* (*A History of the Tradition and Interpretation*

of Its Uses): Jesus' Love Command in the Synoptic Gospels and the Early Christian Paraenesis (Cambridge: Cambridge University Press, 1979).

Rad, v. G./W. Foerster, "*εἰεήνη κτλ.,*" *TWNT* 2.398-418.

Reasoner, M. "Paul's God of Peace in Canonical and Political Perspectives," in *The History of Religions School Today* (eds. T.R. Blanton IV/R. M. Calhoun/C. K. Rothschild; WUNT 340;

Tübingen: Mohr-Siebeck, 2014) 13-25.

Schnübbe, O. *Der Friede (shalom) im Alten und Neuen Testament – eine notwendige Korrektur* (Hannover: Lutherisches Verlagshaus, 1992).

Söding, T. *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995).

_____. *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015).

Strobel, A. "Die Friedenshaltung Jesu im Zeugnis der Evangelien - christliches Ideal oder christliches Kriterium?" *ZEE* 17 (1973) 97-106.

Swartley, W.M.(ed.) *The Love of Enemy and Nonretaliation in the New Testament* (Louisville, KT: Westminster/John Knox, 1992).

Swartley, W. M. *Covenant of Peace: The Missing Peace in New Testament Theology and Ethics* (Grand Rapids: Eerdmans, 2006).

_____. "Peace in the NT," *NIDB* 4.422-423.

_____. "Politics or Peace (Eirene) in Luke's Gospel," in *Political Issues in Luke -Acts* (eds. R. J. Cassidy/P. Schaper; Maryknoll, NY: Orbis Books, 1983) 25-33.

_____(ed.). *The Love of Enemy and Nonretaliation in the New Testament* (Louisville, KT: Westminster/J. Knox, 1992).

Wengst, K. *Pax Romana: Anspruch und Wirklichkeit* (München: Kaiser, 1986)=*Pax Romana and the Peace of Jesus Christ* (London: SCM, 1987).

De Villiers, P.G.R. "Peace in the Pauline Letters: A Perspective on Biblical Spirituality," *Neot* 43 (2009) 1 -26.

Wischmeyer, O. *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).

Wolter, M. *Rechtfertigung und zukünftiges Heil: Untersuchung zu Röm 5,1-11* (BZNW 43; Berlin: de Gruyter, 1978).

Yee, T.-L. N. *Jews, Gentiles and Ethnic Reconciliation: Paul's Jewish Identity and Ephesians* (SNTSMS 130; Cambridge: Cambridge University Press, 2005).

Yoder, J.H. *The Politics of Jesus* (Grand Rapids: Eerdmans, Cambridge: Cambridge University Press, 1972).

_____. *The War of the Lamb: The Ethics of Nonviolence and Peacemaking* (Grand Rapids: Brazos, 2009).

Yoder, P.B./W.M. Swartley (eds.). *The Meaning of Peace* (Louisville, KT: Westminster/John Knox, 1992).